

谷川彰英著 『柳田国男と社会科教育』

(三省堂、1988年)

森 茂 岳 雄

1

かって和歌森太郎は次のように述べたことがあった。

「既にその研究者が若干はいるように、柳田国男の人と思想を研究することが、方法的にも、体系的にも、十分な独自の人物研究論として成り立つならば、民俗学ではなく、柳田を対象とする学問という意味において、柳田学の概念は成立するだろう。しかし、シェークスピア学会があるようには、柳田学会というものができるまで、未だしである。そんな学問ができるには、柳田がシェークスピアやゲーテのような、国や民族を超えた、人類文化史上の人物として評価されるのを待たねばならぬ。」(『柳田国男と歴史学』, 1975年, p.215)

この記述から10数年を経た今日、和歌森の指摘通り、「柳田学会」なるものは成立していないが、柳田国男の学問を指して「柳田学」と呼ぶことは一般的になって来たように思われる。

この柳田学への関心は、1975年の彼の生誕百年を頂点に、その後も日本の内外において様々な視点から研究が進められてきている。今年(1988年)に入ってからでも、著者の形で出版されたものだけでも佐伯有清『柳田国男と古代史』(吉川弘文館)、庄司和晃『柳田国男と科学教育』(明治図書)、そして本書『柳田国男と社会科教育』と続き、年内には後藤総一郎監修の初の伝記『柳田国男伝』(三一書房)の刊行が予定されている。

この谷川氏や庄司氏の著作からもわかるように、近年になってようやく、柳田の仕事(学)の視点から見直す作業が進められ、柳田学研究の裾野をさらに広げてきている。谷川氏は述べる。「民俗学者の中で柳田国男ほど教育に言及し、教育改革のために尽力した学者はいない。その姿勢はいうまでもなく、戦前から一貫したものであった。」それも、「占領下のアメリカ流の教育改革ではなく、日本の風土と土壌を見すえた地をほうような教育改革論を展開した。」(p.4)このような点に注目しながら、本書は中でも「社会科教育における柳田国男の足跡をたどりながら、教育改革者としての柳田国男を浮き彫りにすることを意図している。」(p.5)

以上のような課題意識に立って、柳田及びその周辺の文献を丁寧に紹介しながら(本書全体の半分が柳田及びその他の文献からの引用で占められている)、論が進められる。

2

本書の章構成及び概要は次の通りである。

はじめに — 教育改革者としての柳田国男

I 柳田国男と社会科教育

「世間教育」論

柳田社会科

II 柳田教育論の形成

教育の実際化

「史心」の育成

柳田国男の教科書論

III 現代教育と柳田国男

『村と学童』 — 教材論的考察

柳田国男の道德教育論

上原専禄と柳田国男

まずI章では、日本近代の学校教育がおろそかにしてきた、柳田のいう「世間教育」の意義とそれを今日にどう生かすかが論じられる。そして、それを前提に成立したいわゆる「柳田社会科」の展開、理論、内容、実践が詳しく紹介される。ここで柳田が近代学校を批判的にとらえる視点として提出した「世間」という概念を谷川氏が評価し、「社会科という教科の成立基盤を探るのに不可欠」(p.29)であるとし、その概念を「社会」などと対比しながら分析している点は示唆的である。

次にII章では、柳田教育論の形成が様々な側面から論じられる。まず、「今の日本の教育に必要なものは、イデオロギーではなく、ひとりひとりの子どもが大地にしっかり足をすえ、日本の社会をどう作っていきべきかを考える子どもを育てることである」(p.78)という認識に立って、すでに戦前からそのことを「教育の実際化」ということばで主張した柳田の教育論を、国語教育と郷土教育の二つの側面から考察する。次に、柳田歴史教育論の中核ともいうべき「史心」の育成と、その為の歴史学習の方法としての「倒叙法」の意義について具体的に論じられる。さらに、柳田の教科書観 — 特に歴史教科書論の考察を通して、谷川氏の主張する「教科書手がかり論」「教科書道しるべ論」の今日的意義が指摘される。柳田の教育論を「教科書論」から考察するというのはこれまでにないユニークな視点である。ただ、「柳田教育論の形成」という章題のもとに、なぜ「教育の実際化」「『史心』の育成」「教科書論」という三点が取り上げられた

のか、それらの関連性については明らかではない。

最後に、Ⅲ章では、柳田教育論が現代教育に対してもつ意義について、いくつかの側面から論じられる。まず、柳田の子ども向け読み物『村と学童』（1945年）を取り上げ、「これは立派な『社会科』のテキスト」であり、その中の「六つの話をそれぞれ『単元』と考えれば、それを細かく分けた節は、一時間ごとの授業のトピックであるといってもよい」（p.141）と述べ、『村と学童』のもつ社会科教材としての意味を指摘する。次に、今回の教育課程の改訂で新設が決まった「生活科」が「道徳科」もしくは「修身科」になってしまうのではないかという問題意識のもとに、過去に修身教育を批判し、日本人の基層文化的道徳観の重要性を主張した柳田の道徳教育論に言及する。その中で特に、常民の道徳教育の方法としての「笑い」のもつ教育的機能について指摘する。そして終節として、柳田国男との比較において上原専禄を取り上げ、その共通する教育認識を抽出するとともに、上原の世界史教育論の今日的意義について述べる。ただ、ここではなぜ柳田との関係で上原を取り上げるのか、その比較の視点（基準）が明らかにされていないため、本書の全体構成からみて、本節だけが浮き上がった形となっているように思える。

3

最後に、紙数の都合上二・三の点についてのみ、本書への意見と期待を述べて終りたい。

第一に、谷川氏は、かつて柳田の教育思想について論じた中で、柳田教育論の「原型」が、明治30年代の農政学の中に見い出しうることを指摘された。（谷川編『社会科の新展開3・文明と伝統の授業』、明治図書、1977年）私もこの見解に基本的に賛成である。しかし、今回、本書において、その「原型」が農政学以降の柳田の「学問」の形成過程を通して、どのように戦後の「柳田社会科」の構想へと発展していったかについての検討がなされなかったことは残念であった。今後、この点の解明を期待したい。

第二に、また谷川氏は、かつて森分孝治氏の「社会科学教育論」を批判した中で、「私は、鶴見俊輔氏の『限界美術論』にちなんで『限界教育論』なるものの構想を考えているが、科学という問題もはじめてそこに位置づけられることになる」と述べられたことがあった。（「社会科以前のこゝろ — 社会科認識の原初 — 」、『社会科教育学研究』2、明治図書、1976年）鶴見氏によれば「限界芸術」とは、「芸術と生活の境界線にある作品」のことであり、その「問題に学問の立場から注目したものに、柳田国男の民俗学がある。」（『思想の科学事典』、勁草書房、1969年）この意味で、今回、「限界教育論」という視点からの柳田教育論の解明を期待して本書を読んだのであるが、この点についても言及されていなかった。氏の「限界教育論」の構想が具体的に明らかにされることを望みたい。

第三に、氏は、本書の中で「柳田をプラグマティストだといった人はまだいないが、私は柳田は日本的プラグマティズムを代表する思想家であると考えている」(p.89)と述べているが、これは明らかに事実誤認である。「プラグマティスト」という言葉は使わないにしても、先にあげた鶴見俊輔氏や初期の思想の科学研究会に参加した人々の柳田国男論は、柳田にプラグマティストの側面を見出ししている。この点は、谷川氏の編集した『文明と伝統の授業』の中において、酒井忠雄も指摘している所である。(p.56)

以上、浅学の非礼を顧ず意見を述べさせていただいたが、本書は柳田国男の社会科教育論についての最初のまとまった著作であり、柳田の業績を教育の観点から見直した数少ない仕事の一つである。特に、社会科の解体が現実のものとなった今日、もう一度本書を手がかりにしながら、柳田社会科の意味について考えることは意義があると考え。

(武蔵野音楽大学)